

黄色肉芽腫は、組織球の増殖とそれらに脂質の蓄積を伴う、皮膚に好発する肉芽腫性病変で、単発性または多発性に、表面平滑な丘疹や結節として発生する。一般的には乳幼児期、小児期に発症し、若年性黄色肉芽腫の名称で知られているが、成人の発症例もわずかながら報告されている。口腔領域での発生は非常にまれで、臨床所見から診断することは困難な場合が多く、報告例の多くは術後の病理組織学的検索で黄色肉芽腫と診断されている。今回われわれは、成人の舌に生じた黄色肉芽腫の症例を経験したのでその概要を報告する。患者は30歳代女性で、約3か月前より右側舌縁の腫瘤に気付くも疼痛がないため放置していた。縮小傾向がみられないため、近在歯科医院からの紹介により当科を受診した。初診時、右側舌縁に直径8mm、弾性軟で可動性のある腫瘤を認めた。表面は正常粘膜色で、一部で内部が淡黄色を呈しており、腫瘤周囲は白色を帯びていた。また、前方には直径4mmの線維腫様の腫瘤を認めた。これらの所見より、舌の良性腫瘍の診断のもと切除を行った。組織学的には筋の表層に形成された境界明瞭な病変で、大型で類円形の細胞と小さな長円形の細胞の密な増殖からなり、細胞質は泡沫状を呈していた。さらにTouton巨細胞もみられ、増殖細胞は免疫染色でCD68抗体に陽性であった。病理組織診断は黄色肉芽腫で、前方の腫瘤は上皮の乳頭状過形成であった。舌縁は機械的刺激が加わりやすく、上皮の乳頭状過形成と併発したことを考慮すると、舌への慢性的な機械的刺激が発生原因のひとつと推察された。2年半経過した現在、再発は認めていない。

4. 小唾液腺由来粘液嚢胞に対する凍結療法の臨床成績

Clinical results of cryosurgery for mucocoeles of minor salivary glands.

○山内 博仁, 川井 忠, 角田 直子,
小原 瑞貴, 鈴木 舟, 宮本 郁也,
武田 泰典*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部
口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野*

要旨

【緒言】

小唾液腺由来粘液嚢胞に対して凍結療法を行った治療成績について報告する。

【対象と方法】

2019年1月～2020年3月に粘液嚢胞の臨床診断となった47例中、凍結療法を希望した24例を対象とした。局所麻酔は行わず、病変の冷凍凝固30秒を1回に2～3度繰り返した。病変が消失するまで経過観察し、処置は1～2回行った。消退傾向がみられない症例については摘出術し、病理検査を行った。

【結果】

患者の最少年齢は2歳、最高年齢は83歳、平均21歳であった。24例中22例は凍結療法で病変の消失がみられた。奏効率は91.7%であった。術後の出血や神経障害は見られなかった。摘出した2例の病理標本では、嚢胞周囲の慢性炎症、瘢痕組織、また小唾液腺の萎縮が確認された。

【結論】

凍結療法は、低年齢患者でも外来で簡便に行える処置であり、粘液嚢胞に対する有効な治療法の1つであることが示唆された。

5. 上顎正中に過剰歯3本認めた1例

A cace whit three excess teeth in the maxillary midline

○笹村 祐杜, 宮本 郁也, 山谷 元気,
角田 直子, 小松 祐子, 川井 忠,
藤村 朗*, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部
口腔医学講座歯科医学教育学分野*

【目的】：今回我々は、上顎正中部に3本の過剰歯を認めた症例を経験したのでその詳細を報告する。

【症例の概要】：9歳女児、歯の萌出に疑問を感じ近在歯科医院を受診し、正中過剰歯を指摘され当科紹介受診となった。既往歴に特記事項はなかった。CBCTにて、上顎正中に1本が埋伏、2本が萌出した円錐状の過剰歯を認めた。歯列